

「子どもの発達理論、大人の発達理論」

明星学園 宮下 智

人は、反抗期を過ごすことで発達していく。これは発達心理学の常識だ。ここを通り抜けることをしないで大人になることはできないわけです。

まず、第一反抗期と呼ばれる時期があり、これは二歳から四歳の時期、魔の二歳、悪魔の四歳、天使の四歳などと言われ、この三歳児の「なんでもイヤ」はほとんど母親を困らせます。「できないくせに何でもやりたがる」「言うことを聞いて欲しいのに絶対に言うことを聞こうとしない」ことは、母親と三歳児との戦争に発展します。

子どもに自我が芽生えてくる時期で…、共感と受容、粘り強い対応が必要です、なんて育児書には書いてありますが、母親のイライラ度はマックスになります。

が、ちょっと考えると、重い知的障がいの方、自閉症の方にこんな時期があったかな？なんて振り返ると、「おや？」と思うことになります。もちろん発達に遅れがあるわけですから、定型発達の子どもたちと同じように、二歳から四歳の時期に第一次反抗期がやってくるなんてことはないのですが、じゃあ十歳の時に来たのか？二十歳の時に来たのか？と考えてもどうも心当たりがないのが普通でしょう。

では、第二次反抗期。十二歳から十六歳くらいまでの間を指すようですが、第一次反抗期以上に個人差は大きいでしょうから、およそ小学校高学年から高校生の時期と考えることができるでしょう。こちらは、体力も精神的なエネルギーも三歳児の比ではありませんから、「くそばあ」「うるせえ」「関係ないだろう」…、口も達者ですから、親を傷つけるような言動も遠慮なく発せられます。親の所有物としての子ではない、一人の大人としての主張が行動の端々に語られることになります。「お母さんの時はこうだった」などと自分のことを語ることは火に油を注ぐことになります。その母親と違う人間なんだと心が叫んでいるわけですから。

考えてみると、どうもこちらにも重い知的障がいの方や自閉症の方に訪れたような気配はなかなか見つかりません。

第一次反抗期が無かった人に第二次反抗期は来ないなんていうルールは無いですから、やってきてもいいわけですが、五十歳、六十歳であっても、第二次反抗期の経験のない方々がほとんどのような気がします。

とすると、第一次反抗期や第二次反抗期がないことは、知的障がいや自閉症の障がいがある原因なのでしょうか？いやいや、決してそうではありません。いくら重い知的障がいがあっても彼らにも意思はありますから、それには育ち方、育てられ方に課題があると考えた方が良さそうです。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

先日、成人発達理論という本を読みました。発達理論と言えば、子どものこと、せいぜい思春期までのことと皆さん考えるのですが、この成人発達理論によれば、成人（二十歳）に達してしまったら知性は、身体能力と同じようにほぼ止まり、それ以上は発達しないと考えられてきた常識は、すでに打ち破られ、人間の知性の質の向上は、二十歳以後も続き、高齢になるまでそのプロセスは続くというのです。

そして、その知性の発達段階は三段階になっていて、第一段階を「環境順応型知性」と呼び、その特徴は①周囲からどのように見られ、どうゆう役割を期待されるかによって自己が形成されるとなっています。

ここまで読んで（本の始まりのたった二十ページほどのところまでなんです）、明星での実践と彼らの知性の確かさに確信が生まれました。明星という脱父親、脱母親以前の状態、父親や母親の考え方に支配され、怒られ不安や見捨てられ不安の中で暮らしている姿が、この第一段階と全く同じであると気づいたからです。

重い知的障がいの方々、自閉症の方々が、両親の期待、家族の期待、また施設職員の期待、大きくは社会の期待の中で精一杯順応していく姿（我慢している姿）が、まさにこの段階に当てはまります。

そして二番目の特徴はこんなふうにかかれてあります。②帰属意識をいなく対象に従い、その対象に忠実に行動することを通じて一つの自我を形成する。もうNHKテレビ番組ではないですが「ガッテン、ガッテン」という感じです。

大人の知性について書かれている本の内容が明星の重い知的障がいの方々の心のありかたを理解するのに応用できるということは、彼らの心のありかたは、知的障がいの枠の中で考える必要はなく、定型発達の方々の成人発達理論にそって考えることができるということになります。

さらに、この「環境順応型知性」の方々が占める割合は、全体に対しておよそ六割だということです。驚くべき数字です。大人になることは自立だと説きながら、おそらく経済的には自立をしても、心の発達においては、自立とは程遠い方々が六割いるということになります。自分らしく生きていると本人は感じながら、実は回りの期待に応えているだけに過ぎないという方が、六割いるということになります。このような方々の行動特徴は指示待ちで他者依存的です。

では、知性の次の段階は何でしょう。それは「自己主導型知性」とされています。その特徴は①自分自身の価値基準を確立し、回りの期待について判断し選択ができる②自分の立場を鮮明にし、自分が何ができるのかを決めることができる、そのプロセスを通じ自己を形成する、とあります。また、このレベルに達することができる人が約四割だと書かれています。



この理論の理解を進めるために、具体的な例を挙げて考えてみましょう。

K・Kさんは、十五年前、運動会と言えば、開会式から参加するものの、会の始まりから大声で「君が代を歌いますねえ！」と叫び続け、職員に「静かに」と注意をされれば「叩きますねえ！」とさらに大声を上げて叫び続けました。彼女、叫び続けているとはいえ、差し当たり運動会には参加しているのですから、周囲の期待に応え（運動会というものは、みんな同じように最初から最後まで頑張って参加することが良い子がする行動である）、そのプロセスの中で自己を形成していつているわけです。典型的な「環境順応型知性」の段階にいたることが分かります。

その後の十五年、彼女はほとんど行事には参加しないで過ごします。それは、第一次反抗期のような、第二次反抗期のような…、しかし、その中で彼女は確実に自己を確立していきます。

そして十五年後の生活発表会、彼女は、観客席に座って楽しそうにクラスの劇の発表を鑑賞しています。その姿は、もはや「環境順応型知性」の段階ではありません。私のすぐ前に座って鑑賞していたのですが、「叩きますねえ！」と強迫的に話しかける様子など全くありません。彼女は生活発表会は、劇を発表するステージの上と鑑賞する観客側（劇を発表する皆さんを応援する立場と考えてもいいでしょう）で成立していて、自分は観客側として参加することを選択する、という紛れもない「自己主導型知性」の段階に達していたのです。

さらにそれから一年後の明星きらめき祭、彼女は何のためらいもなく開会式から穏やかに参加し、最後のお神輿かつぎまで楽しそうに参加したのでした。

成人発達理論では、第三段階の知性を「自己変容型知性」と呼び、矛盾や反対を受け入れることができ、一つの価値観をいただくことを完全性とは考えず対立する両者を統合することによって自我を形成すると定義します。この段階に達することができる人は、ほんのわずかだと書かれています。

K・Kさんの明星きらめき祭での姿は私にはこの第三段階の「自己変容型知性」に重なってしまうのです。おそらくアカデミックには、私の今ここで述べてきたようなことは、全くのでたらめかもしれません。しかし、彼女の発達を考えた時、乳幼児の発達理論に彼らを当てはめるのではなく、成人の発達理論の枠組みの中で理解していくという考え方は、彼らを「大人」として捉え直す必要不可欠な視点であると考えます。「いつまでも子ども扱いしないで欲しい」そんな叫び声が聞こえる気がします。

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設 明星学園における心のケア

<http://myojo-satoru.life.cocacn.jp>